

能美古窯跡群の展開

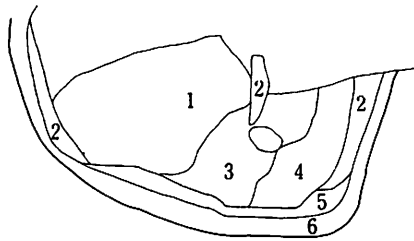
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金沢大学考古学研究会 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/33358

第3章 能美古窯跡群の展開

第1節 既往の調査

能美地域における古窯の確認は、比較的最近になってからのことのようにである。昭和26年刊の『石川県（加賀・能登）石器時代遺蹟地名表』には、この地域における古窯記載はなく、昭和31年刊行の『国府村史』において桔梗岡^{ききょうがおか}、和田見、小谷、穴山の各窯跡が須恵器窯として略図に地点が落されている。桔梗岡は、現在和気1～3号窯跡として報告されているものであり、和田見窯跡では現在でも遺物が散乱している。しかし、小谷窯跡は、現在では土砂採取のため、見る影もなく破壊され、消滅してしまっているが、当研究会の分布調査台帳によると、昭和45年当時までは、灰原と思える遺物包含層の露出が見られたとのことである。

昭和38年の『石川考古20』には、鶴来高校歴史部による和気古窯跡の分布調査の概要が報ぜら



- 1 窯壁（天井崩落部）
- 2 窯壁
- 3 天井の窯壁ブロック層
- 4 少量のブロック層
- 5 粘質床土
- 6 濁赤褐色焼土

第38図 和気1号窯跡 S=1/40

れている。和気地内旧豚舎裏の和気1号窯跡の窯体断面は、現在でも鮮明に確認できる。また和気1号窯採集の須恵器は、昭和42年刊行の『加賀三浦遺跡の研究』にその実測図が載せられており、和気1号窯式として、三浦中層出土の須恵器と同時期に比定されている。

昭和49年度版『石川県遺跡地図』によると、上記の窯跡の他に、寺島窯、下和気窯、徳山窯（昭和37年版『石川県遺跡地名表』にすでに記載あり）の各窯跡が確認されている。

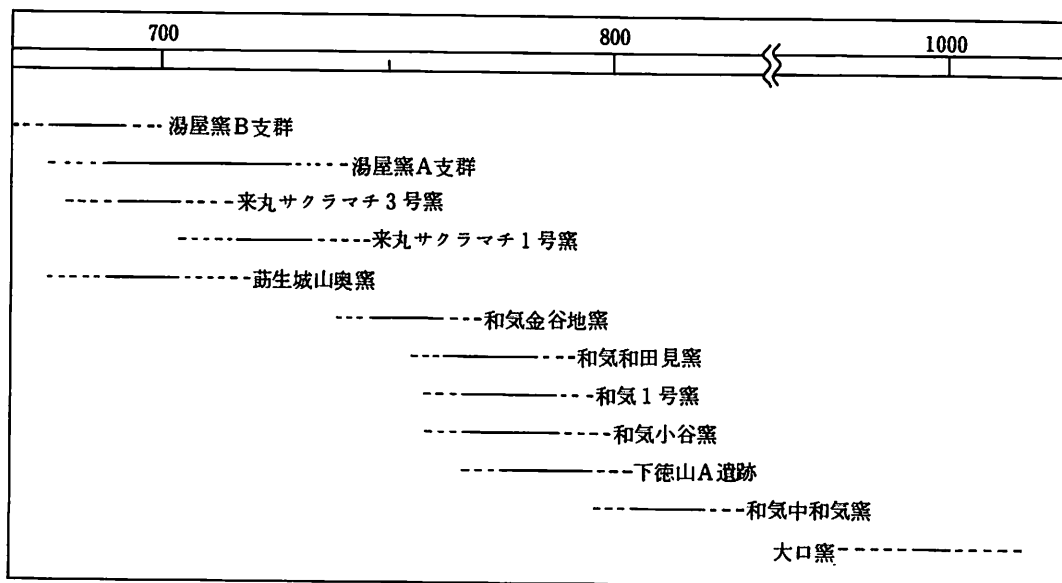
また同年には、加賀産業道路の建設に関連して、前年の試掘調査に引き続き辰口町来丸サクラマチ古窯跡の本調査がおこなわれ、3基の窯跡が確認された。この調査は現時点

における能美古窯跡群中、初めての全面発掘であると同時に、翌年刊行された調査概報からも窯構造およびその編年の位置付けなど重要な遺跡であったことがうかがわれる。

当研究会の分布調査においても上記に挙げた窯跡の他に、数基の窯跡を確認している。昭和45年和気金谷地窯跡（旧大学用地窯跡）、昭和48年下徳山A遺跡、昭和50年蒔生城山奥窯跡、昭和51年湯屋窯A支群、昭和52年湯屋窯B支群、昭和53年和気中和気窯跡、大口窯跡などがあげられる。下徳山A遺跡、蒔生城山奥窯跡は『活動報告第2号』で報告済みである。また、湯屋窯A・B支群に関しては、昭和53年略報としてその遺跡の置かれた現状を報告した。

以上、簡単ではあるが、既往の調査の概要を述べた。

第2節 編年の考察

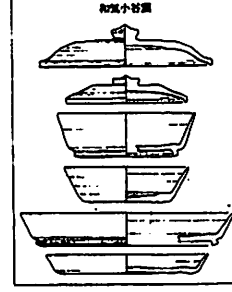
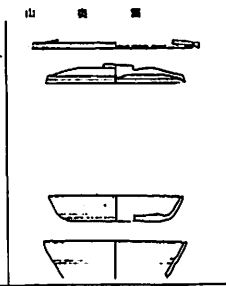
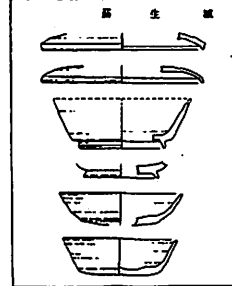
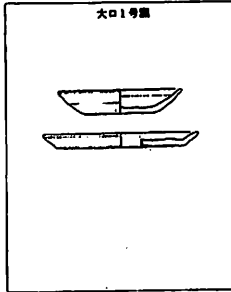
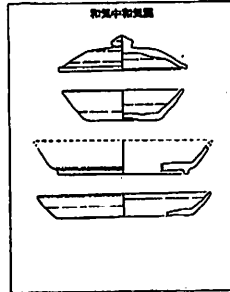
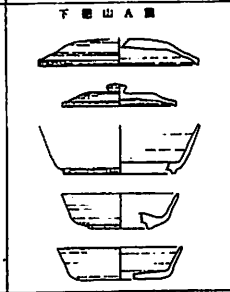
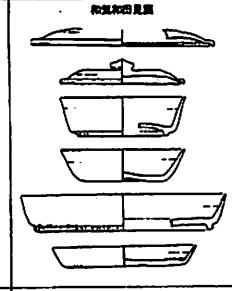
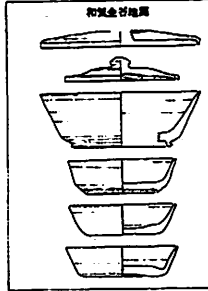
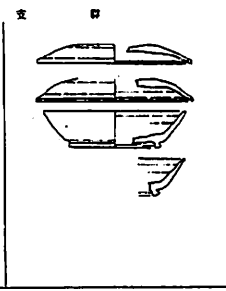
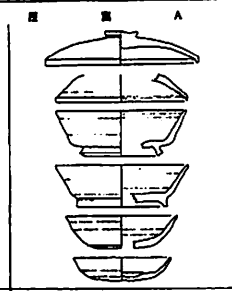
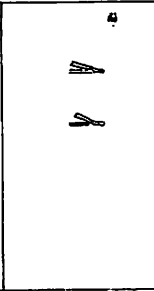
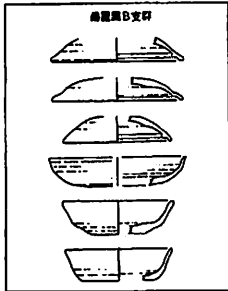
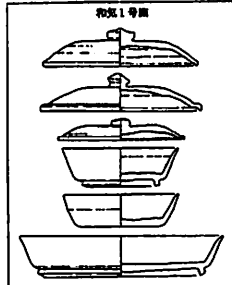
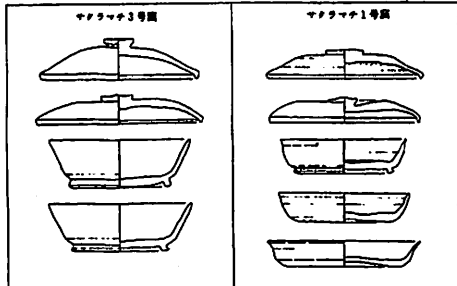


第39図 能美古窯跡群変遷図（試案）

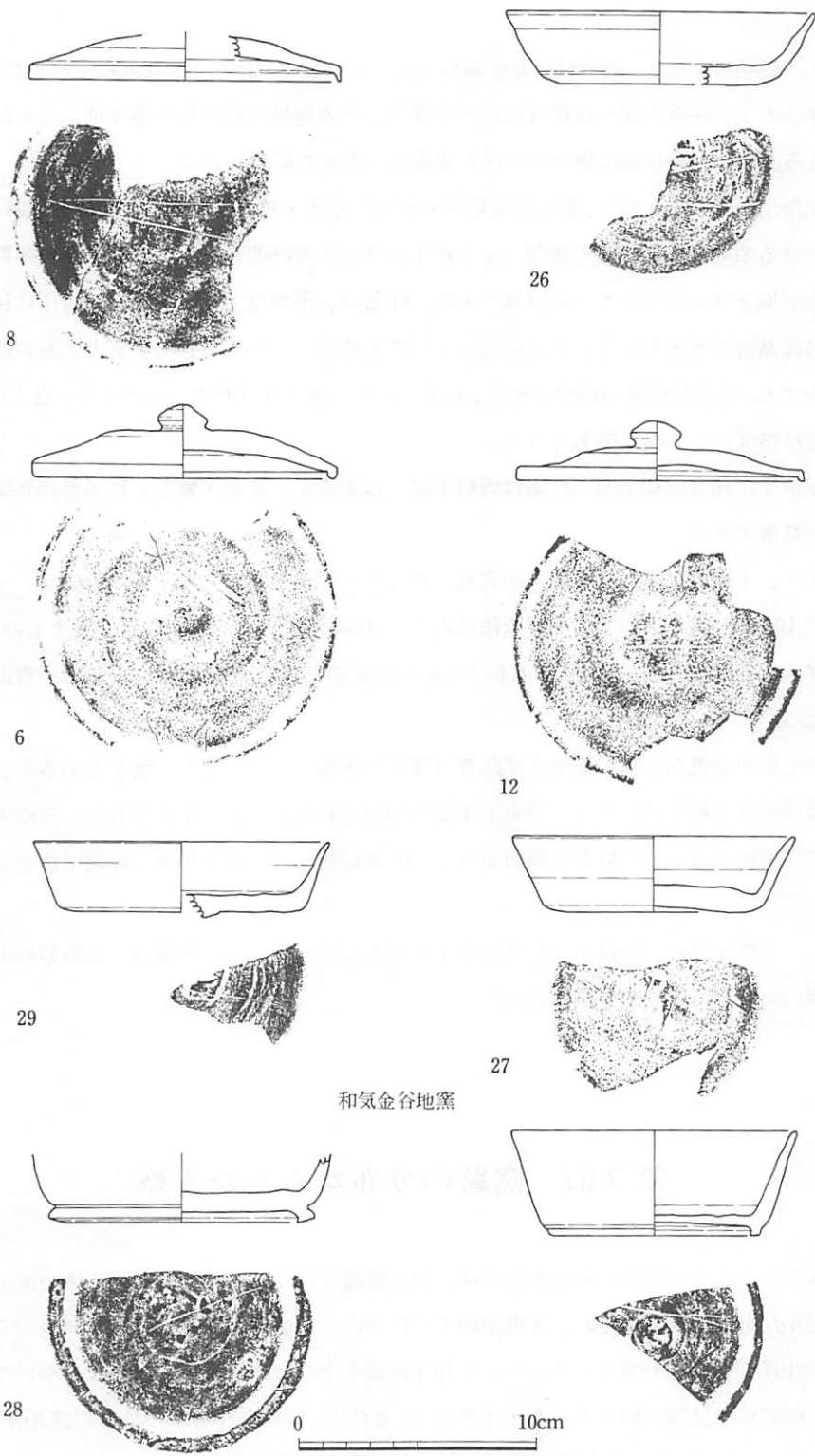
ここでは能美古窯跡群における土器の変遷について杯蓋および高台付杯身を中心に述べてみたい。

現在知られているうち最も古い様相を呈するのは、湯屋窯B支群（7世紀後半～末）のものである。この段階では、杯蓋は口縁内部に大きくしっかりしたかえりを持ち、杯身には高台はみられない。その後、当古窯跡群は7世紀末から8世紀初頭にかけて第一次の活期ともいうべき時期を迎える。杯蓋のかえりは大きくしっかりしたものから、湯屋窯A支群にみられる如く、しだいに小さくなり、ついには消失し口縁端部が鋭く鳥嘴状に折り曲げられるようになる。やがて、それも苜生城山奥窯、来丸サクラマチ第3号窯、および湯屋窯A支群にみられるように、口縁端部は丸味を帯びたものとなる。さらに、苜生城山奥窯、来丸サクラマチ第1号窯では、器高が低くなり扁平化の傾向を示し、肩部に稜を有するようになる。それとともに高台付杯身は、外側に強く張り出すしっかりとした高台を有し、底部と体部との境界の屈曲が明瞭で体部が強く外反するものから高台は短く太く体部の外反も弱くなる傾向を示す。

8世紀中頃、和気金谷地窯の段階になると、杯蓋は天井部中央に平坦部を持つようになり、肩



能美古窯跡群編年略図(S=1/4)



和氣金谷地窯

和氣和田見窯

和氣小谷窯

第40図 須恵器ヘラ記号

部の稜が一層明瞭となる。高台付杯身の高台も短くなり、つぶれたようなものもみられる。また、高台付杯身および杯身の底部は体部に比べて厚く、その境界内面を指で強く押え込んだものが多くみられる。この段階は前段階より一段と規格化が進んだ時期である。

8世紀後半から末にかけて、和氣和田見窯・和氣1号窯・和氣小谷窯・下徳山A遺跡の段階は、北陸における須恵器が量産化の体制のもとに生産された飛躍的時期であり、当古窯跡群においても第二次活期と呼ぶことができる時期である。杯蓋は、平坦な天井部中央から肩部に稜を有し直線的に口縁基部に至るものと、口縁端部に平坦部を持つものがみられる。双方とも口縁返しは直下へ屈曲する。高台付杯身の高台は短く、わずかに外へ張り出す程度で、ほとんど直下に伸る。また、器種構成の上で盤が顕著となる。

9世紀前半、和氣中和氣窯の段階は資料不足ではあるが、杯蓋・盤ともに体部の外傾が著しくなるのが特徴である。

このあと、1世紀以上の間は、窯が発見されておらず空白期間となっている。

そして10世紀後半、大口1号窯の段階になると、杯身の底部はへら切り痕を残すものと、糸切り痕を残すものがみられ、当古窯跡群における糸切り底の初見である。体部の外傾は一層進み扁平なものとなる。

以上が土器の変遷からみた能美古窯跡群の概要である。ここでもう一度まとめると、7世紀後半代に湯屋窯B支群を端緒として須恵器生産が開始され瓦もともに生産された。その後二度の活期を経て9世紀にはいると衰退の傾向を示し、10世紀後半の大口1号窯の段階で終末を迎えるのである。

しかし、9世紀以後、資料が乏しくなり不十分なものとなった。今後はこの時期の当古窯跡群の姿を明らかにしていく必要がある。

第3節 窯跡の分布からみた考察

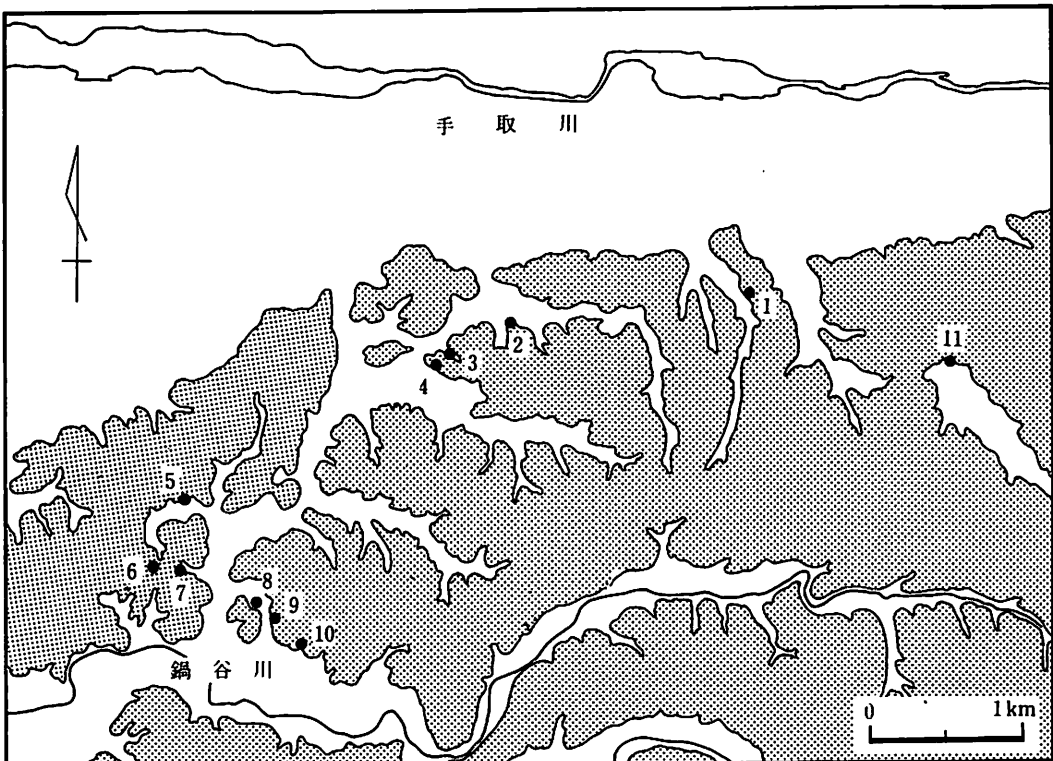
以上みてきたように能美丘陵においては、現在確認されている限り、まず7世紀後半に湯屋窯で須恵器が瓦を伴って生産され、8世紀前半代にかけて筋生城山奥窯、米丸サクラマチ第1・3号窯でも生産がおこなわれている。ついで和氣地域を中心に8世紀中頃～後半にかけて、和氣金谷地窯・和氣和田見窯・和氣1号窯・下徳山A遺跡¹⁾・和氣小谷窯等の多くの窯が生産をおこなっており、やや遅れて9世紀前半には和氣中和氣窯が築窯されている。

これら各窯の位置関係をみると、南北2つの群に分けることが可能である。すなわち手取川に

面した丘陵の斜面に築窯した北群（湯屋窯・蒔生城山奥窯・来丸サクラマチ窯）と鍋谷川に面した和気地内の丘陵斜面に築窯した南群（和気金谷地窯・和気和田見窯・和気1号窯・下徳山A遺跡・和気小谷窯・和気中和気窯）の2つである。また、築窯年代から考えると、この二群は8世紀中頃に境界がみられる。以上のことから、8世紀中頃を境に「北群→南群」という須恵器窯の移動が考えられる。

奈良時代～平安時代初期に金沢平野と手取川扇状地の両方で開発が進展しており、8世紀中頃には金沢市南東の丘陵上の末古窯跡群が築窯を開始している。この8世紀中頃という時期、能美丘陵においては「北群→南群」の移動が考えられる。このことから、湯屋窯B支群の瓦が手取川扇状地の中央に位置している末松廃寺に供給されていた例にみられるように、それ以前に主として手取川以北の平野部へ製品を供給していたものが、末古窯跡群の築窯等にみられる自給体制の確立の中で、8世紀中頃を境に、供給先の変化に伴い南方へ移動したことが推定される。

ところで、8世紀中頃以降築窯された和気地域は位置的にみて、9世紀前半（826）加賀立国に



- | | | | |
|-----------|-------------|-----------|-----------|
| 1 蒔生城山奥窯跡 | 2 来丸サクラマチ窯跡 | 3 湯屋窯A支群 | 4 湯屋窯B支群 |
| 5 下徳山A遺跡 | 6 和気1号窯跡 | 7 和気金谷地窯跡 | 8 和気和田見窯跡 |
| 9 和気小谷窯跡 | 10 和気中和気窯跡 | 11 大口窯跡 | |

第41図 能美古窯分布図

伴い国府が営まれたと想定される小松市古府地内に鍋谷川で結ばれており、距離的にも和気から南西約4 km と近接している。そこで製品の新たな供給先として加賀国府周辺が有力な候補地と考えられる。しかし、当地の須恵器と和気地内の窯の須恵器との十分な検討はおこなわれておらず今後の課題としたい。

註

(1)『活動報告第2号』で報告。当遺跡は、丘陵斜面に立地し、黒色土層がみられることおよび付近に多くの窯跡がみられることから窯跡と推定した。尚、現在土取りのため、遺跡はほとんど破壊されている。

第4節 今後の課題

以下、能美古窯跡群における今後の課題を簡単にまとめると、まず窯跡群始源の問題が挙げられる。これまでに判明している最古の窯としては湯屋窯（7世紀後半～8世紀前半）が知られているが、能美丘陵西部に位置する独立小丘和田山・末寺山・西山等の古墳群より出土した多数の須恵器は5世紀末～6世紀代のもので、その生産地として能美丘陵が有力視されていることから、当丘陵において古墳時代後期からの窯業生産の可能性も強く、当時期の窯の発見を今後の分布調査に期待したい。

次にこれまでの分布調査でさらに鮮明化されつつある奈良～平安期の窯跡群における種々の問題についてさらに考えてみる必要がある。ひとつは、分布調査とともに周辺の既知の遺跡の遺物等との比較をおこなっていくことを通じて「群の移動」を実証し、それに伴う製品の供給先を明らかにすることである。また地形的に隔絶された小さな盆地に営まれた大口窯跡と他の能美古窯跡群との相互関係、さらには隣接する大口カワラキサ遺跡とのかかわりあいなども考えていきたい。そして、和気中和気窯以降不鮮明になる能美古窯跡群の姿を明らかにしていくことで、能美古窯跡群の全体像へ一歩でも近づいていくよう努力したい。

最後ではあるが、能美古窯跡群の編年に関して諸兄の御批判を仰げれば幸いである。

参考文献 ⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛

参 考 文 献

- ① 吉岡康暢「能美古墳群調査概要」石川考古学研究会 1968
- ② 橋本澄夫「金沢市高島遺跡」金沢市教育委員会 1975
- ③ 西野秀和「筋生遺跡」辰口町教育委員会 1978
- ④ 中島俊一「辰口町・高座遺跡発掘調査報告」石川県教育委員会 1978
- ⑤ 「野々市町御経塚遺跡調査(第8次)概要」石川県教育委員会 1976
- ⑥ 石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団「北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ塚崎遺跡」石川県教育委員会 1976
- ⑦ 鎌木義昌編「日本の考古学Ⅱ縄文時代」河出書房新社 1965
- ⑧ 「羽咋市史」原始古代編 羽咋市 1973
- ⑨ 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ(藤原宮西方官衙地域の調査)」奈良国立文化財研究所 1978
- ⑩ 田辺昭三・平安学園考古学クラブ「陶邑古窯址群Ⅰ」1966
- ⑪ 「陶邑Ⅰ」「陶邑Ⅱ」「陶邑Ⅲ」大阪府教育委員会 1976 1977 1978
- ⑫ 奈良県国立文化財研究所学報 第15・17冊「平城宮発掘調査報告Ⅱ・Ⅳ」1962 1965
- ⑬ 中村 浩「須恵器」考古学ライブラリー
- ⑭ 田中 琢「須恵器製作技術の再検討」考古学研究会「考古学研究」第11巻第2号 1964
- ⑮ 伊藤博幸「轆轤技術に関する二、三の問題—土器製作技法の観点から—」考古学研究会「考古学研究」第17巻第3号 1970
- ⑯ 岡崎卯一・藤田富士夫「富山市金草第一号窯調査報告」1970
- ⑰ 「船橋Ⅰ、Ⅱ」(再版)平安学園考古学クラブ 1979
- ⑱ 佐原 真「平瓦桶巻きづくり」日本考古学会「考古学雑誌」第58巻第2号 1972
- ⑲ 「高松町箕打・みやの古窯」石川県教育委員会・みやの古窯発掘調査委員会 1976
- ⑳ 高橋 裕「辰口町来丸サクラマチ古窯」石川県教育委員会 1976
- ㉑ 「加賀三浦遺跡の研究」石川県教育委員会 松任町教育委員会 1967
- ㉒ 小嶋芳孝「金沢市末町付近の窯跡群とその歴史的性質」『石川考古学研究会会誌第18号』1975
- ㉓ 「南加賀古窯址群箱宮地区調査報告」石川県立大聖寺高等学校郷土研究部「郷土」1978
- ㉔ 吉岡康暢「洲衛古窯址群」『石川考古学研究会会誌第10号』1966
- ㉕ 「浅川第一号窯(灰原)調査報告書」金沢市教育委員会 金沢市埋蔵文化財調査委員会 1976
- ㉖ 南 久和「金沢市黒田町遺跡調査報告書」金沢市文化財紀要19 1979
- ㉗ 小川貴司「回転糸切り技法の展開」考古学研究会「考古学研究」第26巻第1号 1979
- ㉘ 「安養寺遺跡群(上林地区)調査報告」石川県教育委員会 1975
- ㉙ 「倉垣コマクラベ窯跡」「志賀町史」資料編第1巻 1974
- ㉚ 「小松市古府しのまち遺跡」石川県教育委員会 1974
- ㉛ 「羽咋市深江遺跡」(第一・第二次)石川県教育委員会 1975
- ㉜ 椎名慎太郎「精説 文化財保護法」新日本法規出版 1977
- ㉝ 「金沢大学考古学研究会活動報告第1号」金沢大学考古学研究会 1974
- ㉞ 「金沢大学考古学研究会活動報告第2号」金沢大学考古学研究会 1976
- ㉟ 「辰口町湯屋古窯(仮称)寺井町和田山下遺跡(仮称)調査略報」金沢大学考古学研究会 1978